

今，学校現場は，学校評価，教職員評価，業績評価，授業評価などの様々な評価に晒^{さら}されている。これらは学校の事業や活動をPDCAというマネジメントサイクルを活用しながら，客観的な評価の目を導入し，自らを律していくことを目的としている。自ら変わっていくことが強く求められてきている。

私たちが日々行っている授業も，眼前の子どもの事実（成長や課題など）が変容する以上，当然，評価を意識する必要がある。評価には，授業者が自ら授業を評価する自己評価もあれば，子ども・教職員・保護者・地域住民が行う他者評価もある。しかし，我々がこれらの評価で疲れては意味がない。そもそも，評価は，学校や教師を批判するものではなく，子どもをよくするためのものであるはず。また，評価はよく評定とも混同される。指導要録や通知表への記入は，評価の終末行為であり評定と考える。

本時の評価が，本当に子どもの学びをよくするものになっているか改めて考えたい。学習指導案に「登場人物の気持ちを読み取ることができたか。」のような結果を評価するような記述をよく見る。このような考えで，子どもの学びをよくするのであればよいが，過程の状況を評価しながら支援を行う「評価と支援の一体化」を試みたい。意図的・計画的な形成的な評価活動により，例えば「～姿をノートからとらえ，～することにより～できるようにする。」など，支援の根拠を評価とすることが重要だと考える。

教師が，出来る限り子どものつまずきを想定する中で，リアルタイムでの見取りから支援を具体化できようとしておきたい。子どもたちが主体的に学ぶことができるような評価活動が指導計画と同様に重視されている。

冒頭に書いた各種評価が，子どもたちの姿をよくすることに結び付いているかという視点は，常に持ち続けたいものである。

（芝）

学習評価について

評価は，子どもをよくするためのものであり，自覚的な学習を期待したい。
支援の根拠が，評価と考えたい。

指導要録や通知表への記入は，評価の終末行為で，評定である。

評定のために授業が，評定されるために子どもが，存在しているのではない。

評価への信頼性・客観性はもちろん，継続性と簡便性も大切である。